



Đà Nẵng ~ những kỷ niệm khó quên (ダナン ~ 忘れられない思い出)



Nhật Bản-Việt Nam

1973 - 2013



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人 鹿児島県国際交流協会

は じ め に



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 弓 場 秋 信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成2年度にマレーシアに派遣以来22回を迎えました。本事業は、開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通じて、国際性豊かな青少年を育成することを目的に、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会を実施しています。これまでに、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオスの5ヶ国に県下一円から今回の17名を含む269名の中高生を派遣しました。

今年は、「日越外交関係樹立40周年」を記念し昨年に続き6回目のベトナムへの派遣です。「世界の工場と消費国」へ成長する中国への一極依存の高まりからくる政治・経済面でのリスクに対し、「チャイナプラスワン（中国一極から分散へ）」の取り組みが行われています。その分散国の一つとして注目されているのがベトナムです。ベトナムは、戦争終結後1976年南北が統一されベトナム社会主義共和国に改称されました。1992年、日本は政府開発援助を再開し、現在では日本の最大の援助供与国として国際協力機構 JICA による無償資金協力、青年海外協力隊などの技術協力が実施されています。政治経済面においても日本にとって重要なパートナーであり、国造りの熱気漂う「ベトナムの今」を体感してほしい、そんな思いでベトナムに決定しました。

本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、いちき串木野市、南さつま市、南九州市から推薦の14名と、企業の協賛を得ての実行委員会推薦3名の17名は、2回の事前研修でベトナム語、ベトナム事情、青年海外協力隊活動と国際協力、日本・鹿児島について学び、期待に胸を膨らませ平成25年7月21日、7泊8日の日程で鹿児島を後にしました。

団員は、国際協力機構 JICA ベトナム事務所で、ベトナムにおける青年海外協力隊事業や国際協力等について学んだ後、ベトナム中部の政府直轄都市ダナン市で日本語を学ぶ学生の家庭で4泊のホームステイをしました。期間中、ベトナム語を駆使し、現地の人々と共に理学療法士や環境教育隊員として汗を流す青年海外協力隊員の活動現場を訪問しました。また地元中学校での書道、歌、踊り、楽器演奏などの日本文化紹介と同世代との交流・語らいに刺激を受けたようです。

団員の日々の体験・感想が綴られた報告書「Đà Nẵng ~ những kỷ niệm khó quên (ダナン ~ 忘れられない思い出)」を作成致しましたのでご覧頂ければ幸に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた共催市、協賛企業、ダナン市外務局、国際協力機構 JICA 九州、JICA ベトナム事務所、心温まるもてなしで民泊を受け入れて頂いたダナン市の皆様、そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますと共に、今後とも本事業へのご支援を賜ります様お願い申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場 秋信

ごあいさつ	1
鹿児島県商工労働水産部観光交流局長 武盛 武士	

第22回（平成25年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要	2
参加団員等名簿	3
スケジュール	4
地図	5
体験事業ドキュメント（総集編）	6

～事前研修から帰国報告会までの様子を絵日記風にまとめました～

団員が感じたこと	14
----------------	----

「心の交流～真心で～」	久保下 菜 摘
「ベトナムに行ってみて思ったこと」	坂 上 聖 夜
「これからに生かす」	東 拓 志
「ベトナムでの1週間を終えて」	小 林 利 器
「ベトナムでの約8日間」	坂 口 万亜子
「ベトナム人の優しさ」	安 藤 博 香
「ベトナムで体験したこと」	俵積田 悠
「ベトナム研修を終えて」	松 田 侑 穂
「ベトナムで感じたこと」	今 村 紘 実
「ベトナムを訪れて」	服 部 花 音
「ベトナムで学んだ日本」	久 保 友 佑
「ベトナムでの貴重な体験」	田 元 幸 奈
「派遣事業を通して感じたこと」	上 田 尚 佳
「ベトナムでの研修を通して」	永 田 光
「一週間を終えて」	川 畑 結 花
「国際協力と異文化体験」	柳 栄三郎
「ベトナムへ行き」	増 田 美 穂

団長報告	31
------------	----

「ベトナム訪問を終えて」

内和田 浩 巳（公益財団法人鹿児島県国際交流協会 事務局長）

同行者感想	32
-------------	----

「体験事業に同行して」	力 竹 貴 子
「体験事業を通しての気づき」	夏 迫 歩 美
「国際協力体験事業を終えて」	谷 口 光 代
「ベトナム体感記」	三 宅 太 郎
「鹿児島県青少年国際協力体験事業報告」	山 崎 淳 士

新聞記事（南日本新聞）	37
-------------------	----

参考資料

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要	44
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績	45

ごあいさつ



鹿児島県観光交流局長

武 盛 武 士

平成25年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、鹿児島の青少年を開発途上国へ派遣し、それらの国の経済的・社会的発展に貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や、現地で協力活動体験を行うことで国際協力に対する理解を深めるとともに、現地の人々との交流を通じて相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成することを目的としております。

成長著しいアジアの時代の到来を見据え、同地域の環境、経済、多様な文化などに精通した人材を育成するため、県でも様々な施策を積極的に推進しておりますが、現代の国際社会を取り巻く諸問題を解決していくためには、国民一人ひとりが自らの国や地域について見つめ直すとともに、異なる文化・習慣・考え方などについて理解を深める姿勢が重要になってきております。

第22回目となる今回の体験事業では、昨年に引き続きベトナムを訪問されました。ベトナムは、5%以上の高い経済成長率を記録しているASEAN（東南アジア諸国連合）の加盟国であり、経済成長に伴い中間層が拡大している国の一つとして注目を集めています。また、2013年は、日本とベトナムの間で1973年9月21日に外交関係を樹立してから40周年にあたりますので、両国の首脳が40周年を記念し、2013年を「日越友好年」に定め様々な行事を実施しており、この体験事業も日越友好年認定事業の一つとして、実施されました。

7月21日から7泊8日の日程で、現地視察や協力活動体験などを行った団員の皆さんは、この体験事業を通じて、異国の地で国際ボランティアとして活躍する青年海外協力隊員の活動に触れ、また、ホームステイや地元の学校との交流等でベトナムの方々との心のふれあいを体験したことで、国際協力や相互理解の必要性、重要性を実感されたことと思います。

また、異国の地に身を置くことで自国の文化・慣習・生活等についてグローバルな視点から考え、気付いたことが多々あったのではないかと思います。それらのことを心に深く刻み、皆さんが将来国際性豊かなたくましい若者に成長されることを心から期待しております。

最後に、この事業を主催された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会を構成する各団体及び実施に当たり御支援・御協力をいただきました国際協力機構九州国際センター並びに青年海外協力隊の皆様へ心から感謝を申し上げますとともに、関係者の皆様の今後ますますの御発展を祈念いたします。

第22回（平成25年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- 1 主 催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
 ※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
 青年海外協力隊鹿児島県OB会
 公益財団法人鹿児島県国際交流協会
- 2 共 催 鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，枕崎市教育委員会，
 霧島市国際交流協会，いちき串木野市国際交流協会，
 南さつま市友好交流推進協議会，南九州市教育委員会
- 3 後 援 鹿児島県
 鹿児島県教育委員会
 独立行政法人国際協力機構
 在ベトナム日本国大使館
- 4 協 賛 鹿児島空港ビルディング(株) 鹿児島トヨタ自動車(株)
 鹿児島ヨコハマタイヤ(株) (株)鹿児島銀行
 (株)下堂園 (株)ミサカ
 (株)Misumi (株)山形屋
 (株)レイメイ藤井 キンコー醤油(株)
 小正醸造(株) 薩摩酒造(株)
 太陽運輸倉庫(株) 南国殖産(株)
 弓場貿易(株)
- 5 事業の流れ 4月～5月 募集・団員決定
 6月8日(土) 第1回事前研修
 6月29日(土)～30日(日) 第2回事前研修
 7月21日(日) 出発
 7月28日(日) 帰国
 7月28日(日)～31日(水) 表敬訪問
 8月17日(土) 報告会
 9～10月 報告書作成
- 6 派遣国 ベトナム社会主義共和国
- 7 派遣期間 平成25年7月21日(日)～7月28日(日)
- 8 派遣人員 (1) 参加者 17名
 (2) 引率者 6名

参加団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	市 町 村
1	くぼした な つみ 久保下 菜 摘	女	学校法人原田学園鹿児島情報高等学校	2	鹿 児 島 市
2	さか うえ せい や 坂 上 聖 夜	男	鹿児島市立鹿児島商業高等学校	2	鹿 児 島 市
3	ひがし たく じ 東 拓 志	男	鹿児島市立甲東中学校	1	鹿 児 島 市
4	こ ばやし り き 小 林 利 器	男	学校法人原田学園鹿児島情報高等学校	2	鹿 屋 市
5	さか ぐち ま あ こ 坂 口 万 亜 子	女	鹿児島県立鹿屋高等学校	1	鹿 屋 市
6	あん どう ひろ か 安 藤 博 香	女	枕崎市立立神中学校	1	枕 崎 市
7	たわらつみだ ゆう 俵積田 悠	女	枕崎市立立神中学校	1	枕 崎 市
8	まつ だ ゆう ほ 松 田 侑 穂	女	学校法人神村学園高等部	3	霧 島 市
9	いま むら ひろ み 今 村 紘 実	女	鹿児島県立霧島高等学校	2	霧 島 市
10	は っ とり か のん 服 部 花 音	女	学校法人神村学園高等部	2	いちき串木野市
11	く ぼ ゆう すけ 久 保 友 佑	男	いちき串木野市立串木野中学校	3	いちき串木野市
12	た もと ゆき な 田 元 幸 奈	女	学校法人希望が丘学園鳳凰高等学校	3	南 さ つ ま 市
13	うえ だ なお か 上 田 尚 佳	女	鹿児島県立川辺高等学校	3	南 九 州 市
14	なが た ひかる 永 田 光	女	学校法人原田学園鹿児島情報高等学校	2	南 九 州 市
15	かわ ばた ゆ か 川 畑 結 花	女	鹿児島県立垂水高等学校	3	垂 水 市
16	やなぎ えいざぶろう 柳 栄三郎	男	薩摩川内市立東郷中学校	3	薩 摩 川 内 市
17	ます だ み ほ 増 田 美 穂	女	鹿児島県立松陽高等学校	2	曾 於 市

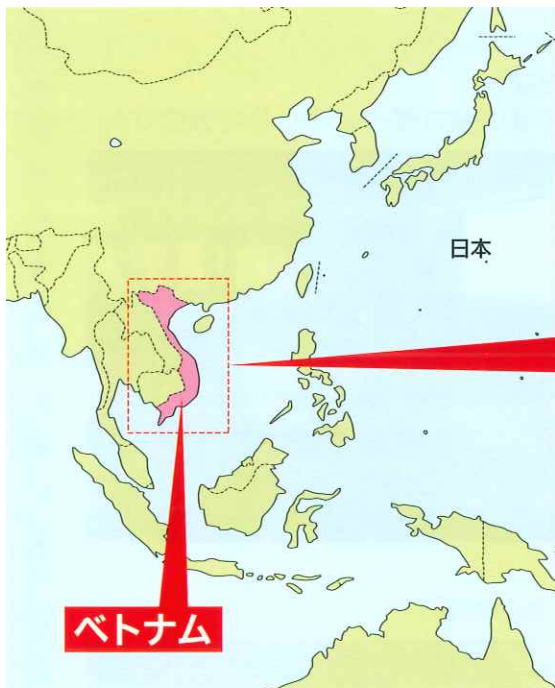
■ 同行者

		名 前	性別	備 考
1	団 長	うちわ だ ひろ み 内和田 浩 巳	男	(公財)鹿児島県国際交流協会事務局長
2	調 整	りき たけ たか こ 力 竹 貴 子	女	青年海外協力隊ニジェールOG(小学校教諭)
3	調 整	なつ ざ こ あゆ み 夏 迫 歩 美	女	青年海外協力隊ベトナムOG(理学療法士)
4	健康管理	たに ぐち みつ よ 谷 口 光 代	女	青年海外協力隊モロッコOG(助産師)
5	記 録	み やけ た ろう 三 宅 太 郎	男	株式会社 南日本新聞社 記者
6	記 録	やま さき じゅん じ 山 崎 淳 士	男	株式会社 鹿児島読売テレビ 記者

スケジュール

月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月21日	日	鹿児島空港 ソウル（仁川空港） ソウル（仁川空港） ハノイ （ノイバイ空港）	13:00 15:55発 17:30着 19:30発 22:05着	KE786 KE683 バス	集合・チェックイン・結団式 ホテルへ移動	ホテル
7月22日	月	ハノイ ハノイ （ノイバイ空港） ダナン （ダナン国際空港）	10:00－11:00 15:15発 16:30着	バス VN7531 バス	ホテル出発 JICAベトナム事務所訪問 ダナン市外務局へ移動 ホストファミリーとの対面式	ホームステイ
7月23日	火	ダナン市	7:00 14:30－	バス	午前：青年海外協力隊員活動視察 ダナンリハビリ療養病院 隊員：小野 優暢（理学療法士） 午後：現地中学生との交流会	ホームステイ
7月24日	水	ホイアン市	7:00－	バス	午前：青年海外協力隊員活動視察 ホイアン市資源環境室 隊員：好田 果奈（環境教育） （ゴミの埋め立て地・コンポストの見学） 午後：世界遺産古都ホイアンの視察観光	ホームステイ
7月25日	木	ダナン市			終日：ホストファミリーと過ごす 夜：お別れ会	ホームステイ
7月26日	金	ダナン市 ダナン （ダナン国際空港） ハノイ （ノイバイ空港）	14:15発 15:25着	バス VN1516	午前：ホームステイ先とお別れ ハノイ市内ホテルへ移動	ホテル
7月27日	土	ハノイ ハノイ （ノイバイ空港）	23:35発	バス KE680	終日：ハノイ市内観光	機内泊
7月28日	日	ソウル（仁川空港） ソウル（仁川空港） 鹿児島空港	5:50着 13:00発 14:35着	KE785	解団式（国際線ロビー）	

地図



体験事業ドキュメント（総集編）

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

第1回・第2回事前研修

6月8日(土)、6月29日(土)～30日(日)

国際協力についての勉強



《体験談》

青年海外協力隊ベトナムOG夏迫さん



出し物の練習



語学研修（ベトナム語）
ベトナム人留学生のハーさん



語学研修成果発表（家族の紹介）



ベトナム語の勉強が大変だったが、
友達もでき、役に立つ事前研修だった。

柳 栄三郎

7月21日(日)

結団式・出発



鹿児島空港国際線ターミナル



ベトナムの人とたくさん交流したいです。言葉が通じないこともあると思うけど、そのときはジェスチャーを使ったリして伝えればいいな。

俵積田 悠

7月22日(月)

JICA ベトナム事務所訪問



ダナン空港到着



ホストファミリーとの対面



ダナン市外務局副局長と対面



お姉ちゃんが対面して
すぐに笑顔で声をかけて
くれたので、私の緊張も
ほぐれました。

坂口 万亜子



7月23日(火)

青年海外協力隊員活動視察
ダナンリハビリ療養病院訪問



男女が一緒にいることやオープンな感じ
だったことに驚いた。また、
小野さんのメッセージが
おごく心に響いたし、
励みになった。

田元 幸奈

小野隊員：理学療法士



病院の職員はとても
活気があった。小野
さん自身も明確な夢
を持っていてとても
人生が楽しそうだった。

小林 利器



タイソン中学校との交流



タイソン中学の出し物
はすごくきれいで見て
るだけで楽しくなった。
日本語がみんな上手で
おごく驚きました。

安藤 博香



“日本”という字を書いて
あげたら跳びはねて喜んで
くれて家にカギをつけて
いてとても嬉しかったです。

久保 友佑



7月24日(水)

青年海外協力隊員活動視察
ホイアン市土地資源環境室

好田隊員：環境教育



本当にゴミの多さにびっくり。40～50年前の日本もこんな風だったなんて想像もできない。ゴミを少しでも減らしていけるように、日本でも努力する!

今村 純実



コンポスト工場ではにおいが臭すぎて、死ぬかと思った。でもここで働いている人のおかげで、ホイアン市民は生活できているんだなと思った。自分もあまりゴミを出さないように努力しようと思った。

坂上 聖夜

世界遺産「古都ホイアン」の視察観光



日本の絵馬のようなものがぶら下げた線香がとても印象的でした。燃えつきると願いが叶うと言われているそうです。

松田 侑穂



7月25日(木)

ホストファミリーと過ごす



本当にこの人達の家ホームステイに来られて、家族の一員になれてよかったなと感じました。

川畑 結花



ホストファミリーの名前も日本語で書いてあげました! みんな喜んでくれました!

服部 花音



お別れ会



別れの寂しさと、悲しさとたくさんたくさん感謝の気持ちがわいてきました。

久保下 菜摘



7月26日(金)

ホストファミリーとのお別れ



ちゃんと私が考えていることが
ベトナム語で話せてよかった。

増田 美穂



ホストファミリーと別れる
のはとてもさびしいです。
でも、また会えることを信
じて別れました。

東 拓志



ベトナム戦争の慰霊碑を訪問



7月27日(土)

軍事博物館視察

ハノイ市内観光

実物の戦車や武器に
みな驚かされました。



ホーチミン像



ベトナムも日本と同じで 戦争で命を
落とした人の犠牲の上に今の平和な
暮らしがある。血がついたベトナムの
国旗や、無残な写真もあり、衝撃的
だった。

上田 尚佳



7月28日(日)

解団式



カムオン
(ありがとう)



7月30日(火)・7月31日(水)

表敬訪問



支援して下さった県内企業や県庁を表敬訪問しました。
たくさんの方々の支援があったからこそ、今の自分たちがいる
ことを感じました。本当にありがとうございました!

団員一同



8月17日(土)

報告会

この17人でベトナムへ行って、色々な経験ができたことは一生の思い出です。
そして、この事業に関わっている全ての皆さんに感謝しています!

永田 光



団員が感じたこと

心の交流 ～真心で～

鹿児島情報高等学校 2年 久保下 菜摘

“ストリートチルドレンや貧しい国の子供達、紛争で苦しんでいる子供達の手助けがしたい。”私の想いはベトナム派遣後、確信へと変わり、そしてより強くなりました。私はベトナム派遣前、ただ単に“国際協力に携わりたい”という漠然とした目標しかないことに悩んでいました。でも、実際に青年海外協力隊のお2人の活動現場を視察したり、様々な体験談や現状のお話を聞いたり、JICA事務所でJICAの役割や国際協力について勉強したり、国際協力に関する体験だけでなく、たくさんの方々との出会いを通じて、以前から興味を持っていた世界の子供たちのことと、自分の中で“ひとのために何か自分のできることをやっていきたい”という想いが強く結びつきました。

私は夢や目標を語るとき、自信がなくて、“自分の言っていることは、キレイ事に過ぎないのではないか。自分には無理なんじゃないか。”と自分の夢や目標を口にするのを躊躇することがあります。それだけに限らず、何かをするときに“私には無理だ。”と最初から諦めがちなことが多々あります。そんな私はホストファミリーとのお別れパーティーで最後の挨拶を頼まれてすごく緊張していました。“ただ単に言葉を伝えるだけでなく、自分の中にあるたくさんの感謝の気持ちを心から伝えるスピーチにしたい。でも、そんなこと私にできるかな。”そんな不安な気持ちを抱えてスピーチの練習をしている私に気がついたホストシスターがこんな言葉をかけてくれました。“伝えたいと思えば伝えられる。話したいと思えば話すことができる。学びたいと思えば学ぶことができる。変えたいと思えば変えられる。一番大切なのはあなた自身が強い気持ち、想い、心を持つことなんだよ。”その言葉を聞いた私は、いつも日本語で積極的に話しかけてくれたホストファミリーやタイソン中学校の友達のことを思い出しました。私の頭に浮かんできたのは、いつも“伝えよう。話そう。仲良くなるう。”と強い想いを全面にぶつけてきてくれるベトナム人の姿でした。私がこのベトナム研修で学んだこと、それは“何事も自分の想い、気持ち、心次第である”ということです。想いは人を変える。嘘のような話だけど、私はベト

ナムの方々の優しく、温かくて、常に理解しよう、分かり合おうとする愛のあふれた想いに心を動かされ、人間として大切なことに気づかされ、そして変わりました。

私はこのベトナム研修を終えた今、国際協力とは何かと聞かれたらこう答えます。“真の心、真心”だと。私の夢は、国際協力機関に携わり、世界の子供達の手助けをし、笑顔を取り戻すこと。資金を与え、技術を提供する。そうすることで、設備が整い、環境が良くなり、人々の生活基盤が安定する。国際協力機関の役割です。でも私は、資金・技術の提供だけでなく、心を通わせ愛と強い想いの込められた真心で接すること、これこそが世界中の人達の笑顔や、開発途上国と呼ばれる国々だけでなく日本のような自殺者数が増えたり、親が自分の子供を殺したりする心の開発途上に陥っているともいえる国々のより多くの幸せにつながる、真の“国際協力”なのではないかと思います。

最後に、団員のメンバー、引率者のみなさん、日本で企画・応援してくださったみなさん、家族、支えてくださったすべての方々に感謝します。ありがとうございました。カムオン!!



ゴミの埋め立て地



ホストファミリーと 本人：右から2番目

ベトナムに行ってみて 思ったこと

鹿児島商業高等学校 2年 坂上 聖夜

僕がこの体験事業を通して一番印象に残ったことは、ホストブラザーやホストシスター等の学生はほとんどが日本語が話せるということです。ベトナムに行く前は日本語は少ししか話せないと思っていたので、英語が主で、話せることだけベトナム語で話そうと思っていましたが、実際にいってみると日本語がペラペラでとても驚いたことが一番印象に残りました。そして、タイソン中学校に訪問したときにみんなとても日本のことが大好きで、こんなに日本のことが好きな人がいることが本当に嬉しかったし、世界は繋がっているんだなと思いました。

ベトナムに行ってみて分かったことは、日本では普通にできたことができなかったことです。例えば日本はお風呂に入ると普通はお湯が出てきます。でも、ベトナムはお湯が出ない家が多いです。だから自分はお湯が出るありがたさを実感することができました。その他にも水道水が飲めなかったり、道路を横断する時にバイクが多すぎて通れなかったりすることがありました。

ベトナムに行き自分の考え方が変わりました。

それは、ゴミの分別をしようということです。なぜ僕がゴミの分別をしようと思ったかという、青年海外協力隊の好田さんの活動を見たからです。好田さんがどのような活動をしていたかという、環境系の仕事をしていた僕たちはホイアン市にあるゴミの埋め立て地を見学することができました。それを見たときに発展途上国と先進国との違いについて実際に肌で感じる事ができたし、あまりのゴミの多さにとても驚きました。だから僕は少しでも日本でできることはないかと考えました。そして考えた結果、ゴミの分別をしよう決めました。だから今日から始めたいと思います。

今回の体験を通して僕は数えきれないほどたくさんのお話を学ぶことができました。また、この事業で学べたことのほとんどはこの事業でしか体験することができないので、これからの自分に役立てるようにしたいです。自分の将来の夢は英語を使う仕事に就くことを考えていましたが、今は、英語を使う仕事プラス他の人に幸せを与えられる仕事に就きたいと思うようになりました。もし自分がこの事業に参加していなかったら今の自分はなかったので、本当に参加できてよかったなと思いました。またこのような体験事業に参加できる機会があればまた参加してどんどん視野を広げて行きたいと思います。

本当に充実した1週間でした。



ダナンの街にて



ホストファミリーと友人達と 本人：中央左側

これからに生かす

甲東中学校 1年 東 拓志

ぼくはこの体験事業7泊8日間を通して学んだことがたくさんありました。その中でも二つ、特に印象に残っています。

一つ目は、青年海外協力隊として活動している小野さんを訪問した時です。小野さんは理学療法士で、ダナンリハビリ療養病院で活動しています。この病院には子どもから大人まで幅広くいます。日本に比べて機械が少なく、ドクターもほとんどいません。けれど、みんなとてもいい人たちで、楽しそうです。まるで一つの家族のように見えました。また、驚いたこともたくさんあって、病室が男女混合で、日本ではありえません。高いベッドが多く、日本みたいに低いベッドがほとんどありません。患者さんが自主的にトレーニングするところがあったり、不登校の人達のために、心の病を治すところもあります。とてもびっくりしました。また、最後に小野さんがいろいろなことを話してくれました。最初は言葉がなかなか通じなくて、それがストレスになっていって、特に感じたのが、言葉が通じないため、みんなが楽しく笑っているけど、一人だけ笑えないことがストレスだったそうです。けど、ここを耐えてがんばればきっと楽しくなると考え、がんばっていたそうです。そして今見ると病院の中でとても輝いて見えました。先を考えることも大切なんだなと感じました。最後に、好きなことを全力で楽しめば、きっといつか役に立つけど、中途半端はよくないと言っていました。なので、ぼくはサッカーが好きなので、サッ

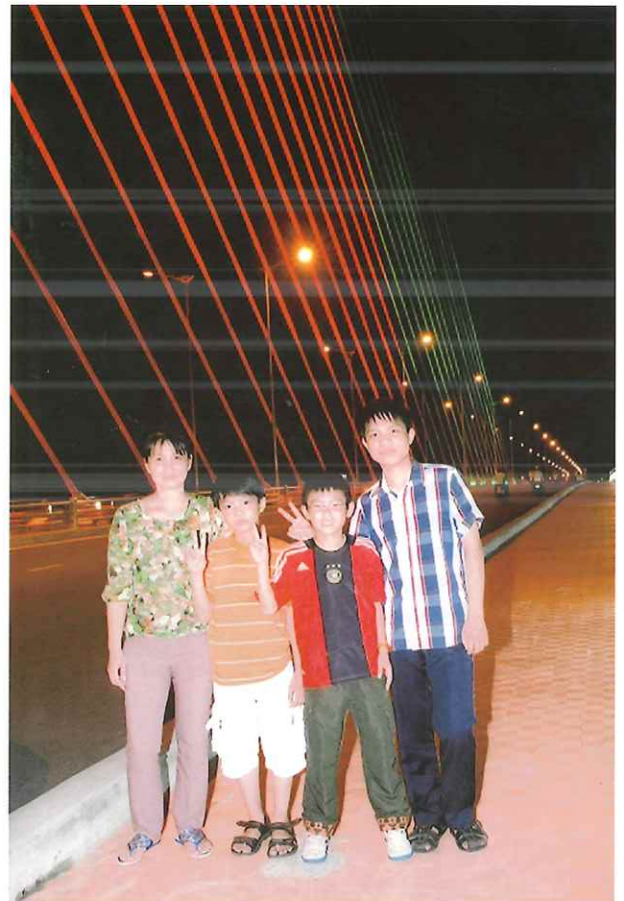


ゴミの埋め立て地の様子

カーを全力で楽しみたいです。

二つ目はJICA事務所に訪問したときです。JICA事務所は日本から海外に、協力隊として派遣するための募集をしています。JICA事務所では開発途上国について学びました。開発途上国で暮らしている人達は世界でだいたい8割ぐらいいいます。開発途上国は、水が手に入らないため、バケツを持って遠くまで歩いて川の水をとりに行きます。決して安全な水ではありません。また、文字が読めない人達もいます。それは学校が少ないし、あったとしても先生がいません。さらに、トイレがありません。日本ではありえません。家にもトイレがなく、トイレを使いたいときは土を掘って穴がいているところにするそうです。また、お金がありません。お金がない理由は、仕事がないからです。このように日本で当たり前のことが当たり前ではない国が多くあります。学校も一緒に、日本では学校に行けるのが当たり前ですが、開発途上国では、学校に行けるのは幸せでうれしいし、誇りを持てます。日本は本当に幸せだと改めて感じました。

学んだことを、これからに生かしていきたいです。



チェリーブリッジでホストファミリーと 本人：右から2番目

ベトナムでの 1週間を終えて

鹿児島情報高等学校 2年 小林 利器

今回ベトナムに行き、日本とは全然ちがう異国の文化や歴史のことをたくさん知り、肌に触れ、カルチャーショックも多々あり本当に内容の詰まった、刺激的な1週間でした。その中でも特に自分の中で印象に残ったことを書いていきます。

まずはベトナムに行く前、自分が一番楽しみにしていたもの、それは食べ物でした。普段日本にいてベトナム料理に縁がなく、1度食べたことがあるかなくらいだったのでとても興味がわいていました。また、自分の母がベトナム料理を好きなのでそれによりまた一段とベトナムの食文化に興味をそそられていました。自分の感想では、ベトナムは家庭料理がとてもおいしく、何度かレストランで食事することがありましたが、ホームステイ先で出された料理の方がおいしかった印象があります。ホームステイ先では、揚げ春巻き、ベトナム風お好み焼きなどを食べさせてもらいました。どれもおいしく、ベトナムに行く前の期待を裏切らないものでした。しかし、そのベトナム人の食文化で自分にとって辛かったものがありました。それは朝ご飯でした。自分は日本にいたとき小食で、プラス特に朝は何も食べられないので朝食を抜いていて、食べたとしてもほんのちょっとしか食べません。しかしホストファミリー曰く、ベトナム人は朝食に重点をおいているらしく、朝からしっかりと食べていました。そのときはこのことがベトナムでの一番の苦難だったと思います。ホストとある程度言語でのコミュニケーションがとれていたのに残したいともいえましたが、食べていたもののおいしかったのと、自分が食べているようすを見るホストの優しい顔をみていたらおなかいっぱいでも、全部食べたいと思ってしまう自分がいました。ですが今思い返してみると、厳しい日程を乗り越えられたのも朝食をしっかり取ったからかな？と、まさかベトナムでそうに感じられるとは思いませんでしたが、日本でもしっかり食べなくてはと感じました。

次に自分はベトナムに行く前、ベトナム人の国民性について調べてからいきました。その調べた内容がベトナム人の国民性は4kで表すことができ、器用、近視眼的、カカア天下、向学心旺盛の4つです。ここで、自分の経験と照らし合わせることにしました。まずは“器用”です。ベトナムの有名な芸術作品の一つに刺繍で作る絵画があります。自分は目にする機会があり、糸だけで作るこの絵

画はとても綺麗で、まさに器用でないと作れないようなものでした。自分はこの刺繍で作った絵をととても気に入って1つ家族におみやげとして買いました。次に“カカア天下”です。ベトナムは歴史的背景もあって、女性が社会を動かす中心にいますので、自分はこのことについてあまり見ることはできませんでしたが、女性で働いている方が多かった印象でした。一昔前の日本と比べてみると女性の地位が高く、発展途上国にしては珍しいことらしくベトナム独自の文化なのかなと感じられました。そして最後に“向学心旺盛”です。残念ながら近視眼的については印象を感じられませんでした。自分が1番ベトナムで驚いたことがベトナム人の向学心で、現地のタイソン中学校を訪ねたときは自分より年下の生徒が上手な日本語を話しているのが驚きでした。さらに驚いたのが学生だけでなく大人も日本語教室などへ行く人が多く、大人になってもなにかを学ぼうという気持ちは自分も見習いたいと思いました。ちなみに自分のホストファミリーにも1人日本語を話せる人がいました。

このように自分がベトナムにいく前にあった先入観とベトナムから帰ってきてからの感想では、同じところもあったし、思いもしなかったこともありました。このことの全ての経験が自分にとってプラスになるだろうし、また将来へのビジョンを立てていく時に役立てたいと思った1週間でした。



ベトナムの朝ご飯



ベトナムの中学生 本人：後列中央

ベトナムでの約8日間

鹿屋高等学校 1年 坂口 万亜子

ベトナムはどんな国なの？と聞かれたら、私はバイクが多くて、ヘルメットをつけてない人もいる国。そして、ダナン市はどんなところなの？と聞かれたら、橋がたくさんあるところ。ダナン市の人はどんな方々？と聞かれたら、笑顔がすてきで、思いやりの心を持っていて、日本について興味を持ってきている人々。と一言で言うところう答えるかな。でも今言ったことは行ってから思ったことであり、行く前に思っていたこととは全く真逆だったこともあります。ダナン市の人々です。私はベトナムの人というあまり表に表情を出さないと考えていました。また、日本について興味をあまり持ってくれていないと考えていました。私が何でそう思ったかという、ベトナム戦争があったからです。だからあまり日本も含め他の国について良い印象がないのでは、と考えていました。実際は私の行く前に思っていたこととは違い、ダナン市にあるタイソン中学校には日本語のクラスもありましたし、日本の漫画や辞典などもあり驚きました。弓道をゴム弓というものを使って披露したら、道着を見て「おさむらいさんみたい。」と言われました。また、ゴム弓を引いてみたいと言ってくれる人もいて、嬉しかったです。書道にも興味を持ってくれました。私の班に書道道具は一つしかなくて、みんなで仲良く使いました。私も何人かに中学生の名前を書いて、みんな喜んでくれました。ある日本語のクラスではない男の子の笑顔が忘れられません。花が満開のような笑顔でした。他にも行ってみて思ったことは、観光名所だけでなく市場にみんなで行ったときに、「こんにちば」や「ニーハオ」と言われたことです。「ニーハオ」ではな

いのだけどなと思いつつ、ダナン市の人々はたくさん
の国に興味を持っているのだなと思い、心の底からうれしくなりました。でも、一番嬉しかったことは、四つあります。まず一つ目は、ホストシスターのデウエンさん（17歳）や仲良くなったニーさん（16歳）がタクシーから降りるとき手を引っ張ってくれたことや、バイクが多い町中、人が多い市場の中などでよく手をつないでくれたことです。とても心強かったです。二つ目は、ホストファミリーに発音が全く合っていないであろう私のベトナム語で「シンチャオ」と言うと、ニコッと笑って「シンチャオ」と答えてくれたことや、ホストファーザーが私に「楽しい」というベトナム語を、私が上手に言えるまで教えてくれ、上手にできるとすぐほめてくれたことです。また、おばあさんやお母さんに「おいしい」とベトナム語で言うと、とても嬉しそうな笑顔で笑いかけてくれたことです。三つ目は、ホストブラザーのホアン（11歳）がデウエンさんに日本語を習って、私に「おはようございます」や「おやすみなさい」を言ってくれたことです。ホアンは今から日本語を習うそうです。四つ目は、ホストシスターのクン（5歳）が、私がベトナム語を分からないことが分かっているであろうに、一生懸命私の横に座ってベトナム語で何かを伝えようとしてくれたり、歌を歌ってくれたりしたことです。

約一週間ベトナムに行かせてもらって、人の心のあたたかさを感じました。ベトナム戦争のことは忘れられるわけないだろうけど、それを乗り越えて前向きに過ごしているベトナムの人々を見てとてもたくましく思いました。今回、JICAや青年海外協力隊の方が働いている所にも訪問させてもらいました。お金を貸したり募金したりすることが国際協力だと思っていましたが、技術を教えたり、コミュニケーションをとってお互いの国を理解したりすることが本当の国際協力だと私は思いました。ベトナムに行けて本当によかったです。ありがとうございました。



ダナン市のバイクの数



ホストファミリーとの最終日 本人：後列左から3番目

ベトナム人の優しさ

立神中学校 1年 安藤 博香

わたしがベトナムに行って一番日本との違いを感じたことは、ベトナム人の暮らしです。

ホームステイ初日わたしは、初めてホームステイ先のチャンさんと対面して不安しかありませんでした。家に着いてその日は、お祈りの日でお母さんの友達も集まっていました。お母さんもお父さんもお母さんの友達もずっとにこにこしてお祈りが終わると夕食でした。夕食はお祈りの日なので、魚と肉を食べない日といって、紫やオレンジのご飯やトマトの豆腐汁でした。わたしは、臭いが独特で食べることができず箸を動かすことができませんでした。その時お母さんの友達やお母さんは、ずっとわたしを見ながら何かベトナム語で話していました。チャンさんはすごく困った顔をしながら日本語で「どうして食べませんか。」と聞くのでわたしは、「すみません。食べられません。」と言うとまた困った顔をしてチャンさんは「わたしの言葉が分からない。」と言いその場をはなれました。わたしは、その時見捨てられたと思いました。だけど、それはわたしの思いこみで、チャンさんは一生懸命わたしの言葉を分かって自分の日本語の先生に通訳をお願いして電話してくれました。そして、わたしの言葉が分かって、チャンさんに「すみません。」と言われ、わたしは、こんなによくされているのに、悲しんでいる自分がすごく情けなく思いました。それから見回りの団長さんたちが来て急にすごく寂しくなって涙が出てきました。そうすると、お母さんもお父さんもすごく困った顔をして、初日は、わたしはすごく失礼な態度をたくさんとってしまいました。でもその後は、チャンさんと会話帳を使ってたくさん話すことができました。それでもわたしは次の日に家に帰るのがすごく憂うつでした。二日目は一緒に力竹さんがついてきてくれて夕食も工夫してくれて、お父さんやお母さんとコミュニケーションをとることができました。お母さんは日本からもってきた味噌汁を気に入ってくれました。わたしは、力竹さんに

背中を押されてベトナム料理を食べてみると、思っていたより全然美味しくお父さんとお母さんもすごく喜んでくれました。そのあと夜に遊びに行ったりおみやげを渡したり、ホームステイ先で過ごすのがとても楽しくなりました。そうしてせっかくホームステイになれてきたところでお別れがやってきました。わたしは、朝まで全然平気だったのに、別れが近づくにつれてだんだん寂しくなってきました。そして、空港に見送りに来てくれて顔を見ると寂しさがこみ上げてきて涙がまた出てきました。そうするとお母さんが抱きしめてくれて、チャンさんは自分も泣きながら、「泣かないで」と言ってみんなで写真を撮りました。

このホームステイでわたしは泣いてばかりでたくさんの人に迷惑をかけたけど、その分ベトナム人の優しさにたくさんふれることができました。



ダナン空港にて 本人



ドラゴン橋をバックに 本人：中央

ベトナムで体験したこと

立神中学校 1年 俵積田 悠

わたしは、学校で事業に参加しないかと勧められたとき、ベトナムとはどんな国だろう、どんな生活をしているんだろう、ベトナムに行ってみたい、と思い応募しました。

実際に行ってみると、ベトナムの人たちはとても優しくかったです。どんどん話しかけてくれます。ベトナムでは日本語の授業があり、日本語で話しかけてくれます。わたしはあまりベトナム語が話せる自信がなかったけど、日本語が通じたので、あまり困ることはありませんでした。だけど、日本語が通じない人もいます。そんな時は、ジェスチャーをしたり、単語を言ったりしました。とても時間がかかったけど、一生懸命聞こうとしてくれとてもうれしかったです。なので、日本ではあまり感じないけど言葉が通じるのはとても嬉しいことなんだと思いました。日本ではできない体験でした。

わたしが、この事業で一番楽しみにしていたのはホームステイです。ホームステイでベトナムの人たちの生活を知ることができました。わたしがいった家では、朝食は屋台で、昼ご飯は家で、夕食も家で食べます。そして夕食を食べ終わった後にまた屋台でいろんなものを食べます。わたしは夕食でおなかいっぱいになってしまったのであまり食べられませんでした。「本当におなかいっぱいですか」「おいしくなかったですか」と心配をかけ

てしまいました。ですが、わたしは少食なので胃が小さいと説明してもらうと、とても笑われ、それからごはんを食べるときにはずっと胃が小さいと言われました。

ごはんを食べ終わった後、シャワーを浴びます。わたしの家はシャワーはありますが、壊れていて使えないし、お湯も出ませんでした。ベトナムは暑いからお風呂もないしお湯も出ないそうです。なので、蛇口からの水でした。蛇口なのでしゃがんでいたけどすぐとなりトイレがあるので動きづらかったです。さすがにショックを受け初日に日本へ帰りたないと少し思いました。日本はシャワーでお湯が出てきます。日本はすごいと思いました。

ベトナムは暑いのでみんな夜にいろんな活動をしています。9時なのに子どもがサッカーをしたりしています。朝は何もないのに、夕方には屋台が出たりと全然違うところに來た気がします。でも、ベトナムは朝が早いです。6時にはみんな起きていて活動していました。ベトナムでは昼の暑い時間に昼寝をするそうです。日本とは違うなと思いました。

この事業でベトナムという国やベトナムの人達の生活も知れました。日本では体験できないことができたし、日本で今まで裕福な暮らしをしていたことに気付くことができました。ベトナムで経験してきたことを生かしてこれからは生活していきたいです。



市場での食事 本人



空港にてホストファミリーと 本人：中央

ベトナム研修を終えて

神村学園高等部 3年 松田 侑穂

ベトナム研修への参加が決まり、事務局から課題が出されました。ベトナムについて調べることで、何となく行きたいと思っていた私にとって、この作業課題はとても面倒なものでした。ですが面倒だと思っていた作業もしていくうちにどんどん楽しくなりベトナムへの興味がわいてきました。そして、先進国日本と発展途上国ベトナムの違いを見つけ、日本の生活のありがたみを肌で感じることで、また、私にできる国際協力をみつけること。この課題をあげ、研修へ参加しました。

二回の事前研修を経て、いざベトナムへ！長時間のフライトを終え、ハノイに到着。首都にある空港なのにもかかわらず空港の電気がほとんどついていないことに驚きました。また、トイレなどの衛生がとても悪く日本との違いを感じました。ホテルについて、お風呂に入りシャワーを浴びると水から臭いがすることに気が付きました。日本では当たり前に出るお湯もなかなか出ないし、水量もとても少なく日本とは全く違います。これが初めて感じた日本の生活のありがたさです。

JICAの方にお話を聞かせていただきました。日本が昔、今のように発展していなかったころ、他の国から支援を受けていました。その支援のおかげで今の日本があるわけです。支援を受けてきた国だからこそ、発展して豊かになった今、途上国への支援は必要なものになっています。日本と途上国の関係として、途上国で作られた機械類の部品が日本に輸入され、それを使って、テレビやケータイ、パソコン、自動車が作られ、それを途上国が輸入するというサイクルがあります。このように日本と途上国は互いに支えあっていることがわかります。ベトナムをはじめとした途上国の国々との関係は必要不可欠であることがわかりました。

また、日本が行っているベトナムへの支援のお話も聞かせていただきました。環境衛生の問題が浮き彫りになっているベトナムへ、生活に欠かせない水を清潔に保てるよう管理するシステムを教えたり、看護師が足りていなかったり医療技術が豊富でない病院へ日本から看護師を派遣したり、田舎の看護師に医療技術を教えたりしています。研修中にお会いした青年海外協力隊の小野さんと好田さんも、ボランティアでこの活動を行っていました。小野さんは理学療法士としてベトナムに派遣されています。そこでは技術を教えることをメインに、患者さんの治療も行っているそうです。そして、環境教育として派遣されている好田さんは、地域のごみ問題に取り組み、小学校を訪問してごみ処理のしかたや、ごみがでるとどうなるかなどの教育をしているそうです。

私の知らないところで、こんなにもベトナムと日

本とが関わり合っていることを知りました。また、JICAを通してベトナムとの交流が40周年ということで、いい節目の年にベトナムに行けて、関わりを知れてうれしく思います。

ホームステイも4日間ありました。生活の中で、日本の生活のありがたさを感じるが多々ありました。まず水道水が飲めること、蛇口をひねればお湯が出ることなど、日本にいたときには気にも留めないようなことがとてもありがたく感じました。

タイソン中学校の生徒やホストシスターは、とても日本語が上手で驚きました。日本語の授業は楽しいかと聞くと、みんな即答で一番楽しいと答えてくれました。また、日本のことを教えるととても興味津々で聞いてくれました。交流の中でベトナムの若い子たちは、日本のことが大好きなのだと感じました。日本人の私にとって、海外の同年代の子が日本に興味を持ってくれているのはとても嬉しかったです。

研修を通して、課題に対する答えを見つけることができました。ベトナムの子どもたちが日本に興味を持ってくれている今、私たちがもっとベトナムのことを知り、コミュニケーションを図れば両国の仲もっとよくなり、今よりもっといい関係が築けるのではないかと思います。小さなことが大きな発展につながることは少ないかもしれないけど、私にできる国際交流をしていきたいと思っています。また、日本の生活のありがたみを感じた今、今の生活に感謝して無駄なく過ごすことができている。これを今度は、日本の友達にも伝えたいと思います。



ホストファミリーと 本人：左



マンゴスチン

ベトナムで感じたこと

霧島高等学校 2年 今村 紘実

7月にベトナムに行っているんなことを感じ、学びました。特に私の中で印象が大きかったのは、ベトナムの風景や道路です。ベトナムの風景は、日本と違い、建物の造りから違って、見た目もとても新鮮で面白かったです。ホストファミリーの家の周りも、初めて見るような風景ばかりでした。道路も日本とは違い結構汚かったり、歩きにくいところもたくさんありました。そして、一番は、バイクの数の多さに驚きました。2人乗りは当たり前で、3人乗りや4人乗りは日本では見ない光景なので、結構驚きました。3歳ぐらいの子供も、ヘルメットも付けず、普通にバイクに乗っていることが多く、危なくないのかなと、少し思いました。日本と違って、バイクがたくさんの国で、事故の発生率が、日本の約3倍と聞き、ベトナムの道路は少し危険という印象を持ちました。

次に私の印象に残ったことは、ホームステイです。この写真は、ホストファミリーの人達と、龍橋を見に行ったときの写真です。龍橋は、日本になく、実際見に行ったら、すごく大きく、とてもキレイでした。長さもとても長く、色が金から青に変わったときは、とても鮮やかでした。周りの夜景もすごくキレイでした。ホストファミリーの方たちは、最初からすごく笑顔で、とても優しく接してくれて、めっちゃ嬉しかったです。普通の家族のように接してくれて、本当に大好きな存在です。日本語を喋れない弟や、同い年の子も、一生懸命話しかけて、伝えようとしてくれたり、トランプを持って行って、遊んだときは、すごく楽しそうにして、毎晩トランプをしようと、笑顔で言ってくれて、私達にとっては普通の遊びだけど、ホストファミリーの人達にとっては、すごく楽しい遊びなのだなと思い、日本の遊びをとっても好きになってくれてめっちゃ嬉しかったです。今回の事業に参加し、本当に良かったです。日本とベトナムの生活環境にた

くさん違いがあることが分かり、日本、そして、自分達の住んでいる場所は、とても恵まれている環境だなと、本当に思い知らされました。今の環境が当たり前だと思わず、どんなことにでも、感謝し、生活したいと思います。

そして、学校に行けることに、少し感謝しようと思いました。ベトナムでは、学校に行けない子たちが少しいるのを聞き、私達日本人は、行けるのが当たり前なので、毎日の学校を面倒くさがらず、大事にしなきゃいけないと思いました。ベトナムで一週間生活して、やっぱり日本の方がとても住みやすいと改めて思いました。日本での生活の便利さ、住みやすさを改めて感じ、日本での良さにたくさん気づきました。今回の事業に参加し、人生でのすごくいい経験になったと思います。



ベトナムの風景



龍橋にてホストファミリーと 本人：中央

ベトナムを訪れて

神村学園高等部 2年 服部 花音

私にとって、ベトナムを訪れた1週間は長いと思っていたけれどすごく短かった1週間でした。

7月の21日から28日の8日間、国際協力体験事業の団員としてベトナムを訪れて学べたことがたくさんありました。

青年海外協力隊の活動視察では理学療法士の小野隊員と環境教育の好田隊員の活動現場へ行きました。

小野隊員が活動しているリハビリ病院には主に交通事故にあって脊髄損傷を負ってしまった患者さんが入院しているそうです。理学療法士とは、主に手や足が不自由な患者さんのリハビリのお手伝いをする職業で、他にも小野隊員は田舎からきた人にリハビリの方法を教えたりする活動をしていました。訪問した病院は開放的で病室はカーテンがなく男女が一緒にの部屋に入院しているというのにすごく驚きました。小野隊員はこの病院を訪れて実習生のマナーや衛生的な違いには驚愕したそうです。また言葉の壁にひどく苦戦をしたようでした。ベトナム語は発音しにくい単語が多く、しかも話すのが早いので聞き取りにくく、わからないときには、積極的に分かってと努力をしている姿に私はすごく尊敬しました。

環境教育の好田隊員の活動視察の最初の現場はゴミの埋め立て地で約2年間のゴミが山のように積まれていて、異臭がしました。次の現場はコンポスト工場でした。その工場では食べ物のゴミや草木などを肥料にして土にかえすという作業をしていて、マスクをしていても、さっきの埋め立て地よりひどい異臭がしました。好田隊員はそこでゴミの分別の呼びかけや小学校で環境教育を行うという活動をしていて、好田隊員のお話のときにはゴミの分別が大切だということをどのようにしたら小学生に伝えられるかという話し合いをしました。すごく悩んだし、私自身も日頃からしっかりとゴミの分別をしようと改めて思いました。

他にも学べたことがありました。それはめげない気持ちです。

ホームステイ1日目、家族と初めて会ったとき私は「シンチャオ」と「カムオン」しか言えませんでした。それは緊張もあったし、ベトナム語なんて話せないと思ったからです。そしてホームステイ2日目、私は諦めずに頑張って話そうと思いました。この日、ダナンのタイソン中学校を訪問して中学生たちが一生懸命に日本語を話しているのをみて、私もめげずに頑張ってみようと思ったからです。その意気込みがホストファミリーに届いたのかいろいろなベトナム語を教えてくださいました。

ホストファミリーや親戚のみなさんはすごく親切で、私がベトナム語を話すために指さし会話帳で調べているとにこにこしながら待っていてくれましたが、やはりペラペラにベトナム語が話せるという訳ではありませんでした。5歳のホストシスターが話しかけて

くれているのに「うんうん」と笑顔で頷くことしかできなかったのがすごく辛かったです。そしてホストファミリーとお別れの日、親戚のお家でみんなで最後の食事。みなさん、「花音さんのこと忘れないよ。また会おうね。」と言ってくれて、私もたくさん伝えたいことがあるのにベトナム語で伝えられないというのが本当に悔しかったです。集合場所にバスが来て、ホストファミリーとお別れのときはホストシスターが急に泣き出して、みんなで号泣しました。

ダナンを訪れて、このホストファミリーに出逢えて本当によかったです。伝えたいけど伝えられないという悔しい気持ちは、一生忘れられないと思います。

今回この事業に参加したことで、言葉の壁というものは越えたいけど越えられないものなんだなと思いました。しかし、努力をしたら越えられるというのも学びました。言葉を伝えたい、話したいとめげない気持ちを持てば越えられると私は思いました。その気持ちを日々持ち続けていけたらと思います。

また、今回の協力隊活動視察をして、私も世界のために何かしたいと強く思いました。

最後にこの体験事業に参加するにあたって、いろいろな人たちにお世話になり、またたくさんのご迷惑をかけてしまいました。協力・応援をしてくれたおかげでこの事業に参加ができ、自分自身少しでも大人になることができたかなと思います。

この団員のみなでこのような一生に一度しかできない体験ができて本当によかったです。



ホストファミリー



ホストファミリーと 本人：右

ベトナムで学んだ日本

串木野中学校 3年 久保 友佑

日越友好40周年という記念すべき今年。僕は、最高のメンバーと貴重な体験をすることができました。これは弓場会長をはじめ、多くのスタッフの皆様ののおかげです。帰国した今、周りの方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

出発前、僕は、ベトナムを訪れるチャンスや出会いは二度と来ないかもしれない。だから、「一期一会」の出会いを大切に異国の地で異なる文化、価値観、生活、考え方を学びたいと思っていました。

実際、ベトナムに到着した僕は、大変驚きました。ベトナムの街には高層ビルに舗装された道路と、僕の予想をはるかに超えた近代的な光景が広がっていたからです。

ベトナムでは道路が埋め尽くされるほど、バイクの利用者が多く、その一方で交通ルールや信号等が整備されていないという実態を目の当たりにしました。訪れたりハビリ病院では、頻繁に起こる交通事故で脊髄を損傷した人を多く目にしました。日本がいかに発展しているかということ、そして、そのおかげで僕たちは安全に過ごせていることに気がきました。

ベトナムでは世界の実状について話を聞くことができました。今、世界の人口の8割もの人が開発途上国で暮らしているそうです。その人々は、文字が読めない、水が飲めない、トイレがない等の問題を抱えていることや、また日本では100%である小学校の卒業率が6%しかないという国もあることを聞きました。以前の僕なら「幸せ」とは、旅行したり、遊んだり、楽しい事することだと感じていたと思います。しかし、この経験を通して、「当たり前のことができること」例えば、健康に過ごせること、笑って過ごせることが本当の幸せなのかもしれないと感じました。

それから、もう一つ印象的だったのが、ホイアン市のゴミの山です。協力隊の方が戦後の日本に似ていると話されたのが衝撃的でした。この事実を今の日本人はどれぐらいの人が知っているのでしょうか。おそらく知らない人が多いのではないかと思います。また、このゴミの山を少しでも減らそうと現地の人と現地のために活動している協力隊の方がいることに、僕は感動しました。



戦後の日本に似ていると言われているホイアン市のゴミの山



都市開発で建設されたばかりの橋でホストファミリーと本人：左

今、アジアの中では日本のことを非難する国があります。そんな中で、僕が訪れたタイソン中学校の生徒たちは日本語を話せる人が多く、とても親日的でした。僕が剣道や書道をしてみせると、喜んでくれて、友好的な人たちだなと感じました。

今回、日本を離れて僕は、初めて日本の素晴らしさに気付くことができました。そして親日的、友好的なベトナムの人々のあたたかさを知りました。日本人であることに僕は幸せを感じています。

今、日本は世界第3位の経済大国と呼ばれていますが、その日本があるのは戦後、世界からの援助があったからと学びました。豊かになった今、日本がすべきことは世界への恩返しだと思います。

僕にとってベトナムは戦争、開発途上国という印象がありましたが、ベトナムは都市開発、経済発展がめざましい国でした。僕はベトナムで見た建設中の建物や空港など、さらに発展したベトナムを4～5年後にもう一度見に行きたいです。そして、ラインやフェイスブックで今も繋がっているベトナムの仲間たちと再会したいです。それまでにベトナムのことをたくさん勉強し、そして、僕がベトナムに今できることを考えていきたいと思っています。

ベトナムでの貴重な体験

鳳凰高等学校 3年 田元 幸奈

この1週間の出来事は、今までに味わったことのない貴重な体験ばかりで、とても充実した日々となった。

ベトナムに着いた時に感じたのは、むわっとした暑さだ。同じ「暑い」でも、日本とは違う暑さだった。湿気が少ないせいか、日本より過ごしやすそうな印象を受けた。ハノイ市からホームステイ先のダナン市に移動した際には、町がきれいだったと思った。バイクが多いのはハノイ市と変わらなかったが、ハノイ市より道が広く、空気がきれいだと感じた。

今回の体験の中で、2人の青年海外協力隊の方の活動を視察した。その中で私が衝撃を受けたのは、環境教育の好田さんの活動現場を視察した時だ。最初に見せてもらった場所には見渡す限りゴミの山が広がっていた。町がきれいだっただけにその衝撃は大きかった。だが、その光景は40～50年前の日本と同じだと教えていただいた。これからベトナムは日本のように発展していくのかなと思った。協力隊員の方々に話を伺った中で私が意外だと感じたのは、言葉の壁に苦労したということだった。協力隊員の方は二年間現地で働いているから、言葉は通じるのだろうと私は勘違いしていた。実際には言葉が通じないこともあり、それがストレスだとおっしゃっていたことに本当に驚いた。そんな環境の中、努力をして言葉の壁を乗り越え、今では周りの人々に信頼されて仕事をなさっている姿はすごく生き生きされていて、格好いいと感じた。

ホームステイは今回私が一番楽しみにしていたことだった。ホームステイ先では家の造りや食生活など日本と違うことばかりで驚きの連続だった。ホームステイ初日の晩は、“植物を食べる日”だったらしく、でてきた料理は野菜や豆腐など植物からできたもののみだった。食べるのが遅い私に、ホストファミリーは「これも食べて」とご飯の上にどんどんおかずをのせてくれた。最初はその行為に驚き、少し抵抗もあった。その後、ホストファミリーと会話をしたがうまく会話が噛み合わず優しくしてくれていたホストファミリーに応えることのできない自分に情けなくなった。残りの日をうまく過ごせるか、不

安の大きい初日だった。二日目の夜、ご飯を食べた後「スーパーに行こう」と誘われ、近くにホームステイしている子やその子のホストファミリーと一緒にスーパーに出かけた。スーパーでも日本と違う習慣がたくさん見られた。そこで不思議になったことをその都度尋ねると、自然にホストファミリーとの距離は縮んでいった。三日、四日と一緒に過ごす時間が長くなるにつれ、その距離はみるみる縮んでいくのを感じた。最終日には“帰りたくない”“ずっとこの時間が続けばいいのに”と思うほどだった。

今回私は、言葉でうまく表すことのできないほどたくさんのことを学んだ。多くのことを経験し、多くの人と出会い、私の視野は大きく広がった。この体験事業に参加して本当に良かったと心から思える一週間となった。



お寺にてホストファミリーと 本人：左



ゴミの山

団員が感じたこと

派遣事業を通して感じたこと

川辺高等学校 3年 上田 尚佳

私は今回の派遣事業でベトナムに行き様々なことを体験した。その中でも特に印象に残ったことを述べてみたい。

まず、今回の目的の一つであった、青年海外協力隊の活動を視察したときの感想である。ダナン市のリハビリ療養病院を訪れたとき、病院内は男女関係なく同じ病室でカーテンなどの仕切りはなかった。そこで働く青年海外協力隊の小野さんの話によると、その病院で働く看護師は、就業意欲がなく、患者の世話をしなかったり、まず字が読めずカルテが読めない人もいるということである。医療機器を導入しても機械を扱える人がおらず、日本の青年海外協力隊が技術を教え、機械も扱える人を養成しているという。それに比べて日本は技術が進歩していて、病院内にはたくさんの機械があり、クーラーの効いたきれいな病室が一人ひとり個別にあったりする。私たちは文字が読めるのが当たり前だが、ベトナムでは学校に行けず、文字が読めない人もいる。日本に生まれた私たちは快適な場所で勉強できることや病気になるたびに病院に行けることなど当たり前になっている。私たちはこのことに感謝しなくてはならないと気付かされた。

ホイアン市の環境教育の視察では大量のゴミが山積みになっており、そのゴミの山の上を女性達がビジネスになるものはないかとゴミを拾っていた事に衝撃を受けた。コンポスト化するにも、性能の良い機械がなく売り物にできる土には出来ないそうだ。ダナンの町や市場にも生ゴミなどが落ちて悪臭が漂っていた。ベトナムのゴミ問題は深刻で、増え続けているゴミに対して処理する機械が追いついていないそうだ。環境教育の好田隊員はゴミを減らすにはどうしたらよいかベトナムの子ども達に教えていた。ベトナムをきれいな町にしたいという気持ちが伝わった。小野隊員や好田隊員のような熱い気持ちで、この活動は支えられていると思った。

次にホームステイをして感じたことは、わたしのホームステイ先の家は、トイレ、洗面所、シャワーが水しか出なかったため、初めは少し抵抗があったが、次第に慣れていった。ホストファミリーは両親

と16歳の女の子と小学生の弟だったが、女の子以外、日本語や英語は伝わらなかったのも、言葉の壁というのは、とても大変だった。しかし、ベトナムの人達は日本人にすごく興味があり積極的に話しかけてくれたので嬉しかった。また、夜になると、近所に住む親戚達と楽しくおしゃべりしたりタクシーに乗ってみんなでお酒を飲みに行ったりと、夜まで仕事をして忙しい日本人と比べると、決して恵まれた環境ではないが、とても人生を楽しんでいるようにみえた。

私もベトナム人を見習って、学校に行くことや家族との団らんなど日常生活を今までよりもありがたく思い過ごしていきたい。



日本人橋の前で 本人：左



最後のお別れ会で 本人：左から2番目

ベトナムでの研修を通して

鹿児島情報高等学校 2年 永田 光

7月21日、期待と不安を胸に、ベトナムへ旅立ちました。

2日目、JICA事務所に行き、ベトナムについて、また、ボランティアについてなど、たくさんのお話を聞きました。ベトナムとはどんな国なのか、ボランティアとはどんな活動をするのか、詳しく理解出来たと思います。そしてその日の夕方、ダナン市に到着し、ホストファミリーと初めて面会しました。ホストファミリーのみなさんは、とても優しく私を迎え入れてくださいました。

3日目と4日目は、実際にベトナムでボランティア活動をしている理学療法士の小野さんと、環境教育のお仕事をしている好田さんの活動視察をしました。小野さんが働いているリハビリ病院には、子供からお年寄りの方まで、幅広い年代の人たちがたくさんいました。日本の病院とは違ってまだ医療器具が十分に揃っていないかったり、ベッドの数が足りなかったりと、不足しているところがありました。それでも患者さんの家族が一日中一緒にいて、不足しているところを補っているように見えて、とてもいいなと思いました。病院で使われている器具が日本製というところにも、ベトナムと日本の繋がりを感しました。環境教育活動をしている好田さんの活動視察では、ゴミの埋め立て地を見て、本当にショックを受けました。ほんの小さな地域のゴミでも、山になっていて、ベトナム全部のゴミの量は、どのくらい多いのだろうと愕然としました。また、そのゴミ山でリサイクルできるゴミを集めてお金にしている女性がたくさんいて、そういうところでも、日本とベトナムの違いを感じました。そのあとに行ったゴミのコンポスト工場でも、たくさんの人が手作業で大きいゴミと小さいゴミを分けているのを見て、自分は絶対にできない仕事だと思うのと同時に、そんな仕事をして生活している人たちがいるということに驚きました。また、ゴミを肥料にするための機械が外国のものであったので、世界中の国々みんなで助け合っているような気がしました。

また、ボランティア活動の視察以外での活動もとても良いものでした。2日目にタイソン中学校のみなさんと交流をしました。中学校のみなさんが本当に日本語が上手で、日本のことが大好きと言ってく

れて、とても幸せな気分になりました。難しい日本語を一生懸命話してくれたり、私たちが話している時は笑顔で聞いてくれたり、ベトナムの人は本当に良い人たちだと感じました。ホストファミリーも、ダナンの街の案内をしてくれたり、美味しいご飯を作ってくれたり、本当に優しく面白い素敵な家族でした。ベトナムで良い一週間を過ごせたのも、ホストファミリーのおかげです。別れる時はとても悲しかったです。いつかまた会えるように、少しでもまた日越関係が素晴らしいものになるように、小さなことでもいいから国際協力できればいいと思います。この一週間は、とても濃い一週間でした。



市場にて



夜、橋を見に行ったときの写真 本人：前列左

一週を終えて

垂水高等学校 3年 川畑 結花

私は夏休みに入ってすぐの7月21日から28日まで国際協力体験事業の団員としてベトナムに行きました。このベトナム訪問は、私にとって初めての海外でした。今まで一週間以上も親元を離れて生活した事は無く、しかも行き先がベトナムということで出発直前まで不安や緊張などのマイナスの気持ちばかりが膨らんでいきました。けれど、ベトナムで一週間過ごしてみて私が感じたのは「ベトナムという国は優しくあたたかい人の多い国だ」ということでした。

ひどく緊張しながらホームステイ先の家の中へと足を踏み入れた時に私を迎えてくれたのはあたたかな笑顔でした。お母さんは一日目の夜に「私はあなたの本当の家族になりたい。だから私のことはお母さんと呼んで。皆の事を本当のお父さん、妹、弟だと思って。」とそう言ってくれました。その言葉が私にとっては本当に嬉しい言葉で、この言葉のおかげで、それまでよりも積極的にホストファミリー達と話をすることが出来たように思います。ホストマザーの事をベトナム語で「お母さん」と初めて呼んだ時、お母さんは「I'm so happy!」と、とても幸せそうな笑顔で言ってくれました。それまで少し遠慮していた部分もあったけれど、勇気を出して言うてみて本当に良かったと思いました。言葉は違ってもお互いが歩み寄れば通じ合うことができるんだということが分かった瞬間でした。

また、ベトナムには日本に関心を持っている人がとても多く、中学校での交流の際もたくさんの学生が日本のことについて質問をしてきました。「日本の事が好きですか?」と聞くとほとんどの人が「大好きです。」と答えてくれる、その度に私は日本の事を誇らしく感じていました。日本の事が好きで、もっともっと日本の事を知りたいと思っている皆に日本語を教えるというのはやりがいのある仕事なんだろうと、元々興味のあった日本語教員という仕事に対して、更に「なりたい」という気持ちが強くなりました。しかし皆が日本の事を一生懸命に勉強して、知ろうとしてくれているなかで、私のベトナムについての知識は本当に些細なもので、勉強不足だということを痛感しました。ベトナムの事は言うまでもなく、日本に関してもまだまだ知らない事

の方が多くて、もっとたくさんの事を知りたい、知らなければならないと思いました。青年海外協力隊の小野さん、好田さんの話もJICAで聞いた話もこの事業に参加しなければ決して聞くことのできなかった話だと思うとこの一週間は私にとってかけがえない時間でした。いざベトナムで過ごしてみると楽しい時間の方が圧倒的に多く、出発前の不安は全て楽しい思い出になって日本に持って帰ってくることが出来ました。けれど、それと同時に後悔したこともたくさんあります。例えば言いたいことを自分で伝えきれなかったり日本の事を聞かれてうまく答えられなかったりなどです。この悔しい気持ちをこれからの勉強の糧にしていきたいと思っています。この一週間で何度か聞いた「お互い様」という言葉が一番私の中に残っていて、これって友好な関係を築いていき、国際協力を行ううえでとても大切な言葉だと思いました。私もこれから「お互い様」の精神を忘れず、小さなことからでも誰かが笑顔になるためのお手伝いをしていきたいです。



ホストファミリーと初めての写真 本人：中央



新しい友達と 本人：左

国際協力と異文化体験

東郷中学校 3年 柳 栄三郎

ベトナムの地に一歩足を踏み入れたとたん、ついに来たのだと感じました。それから1週間は、たくさんの方と出会い、楽しみながら多くのことを学ぶことができました。

特に、ホストファミリーの方と過ごした4日間は、かけがえのない時間となりました。2日目に副局長とお会いして、その後にホストファミリーの方と初めて対面しました。すごく緊張したけれど、すぐに話しかけてくれました。タクシーで家に向かい、到着するとホストファーザーが出迎えてくれました。家にはホアさんとホストファーザーしか住んでいませんでした。でも、夕食の時にホストシスターが毎日来て料理を作ってくれました。料理は、辛いものもあったけれど、美味しいものばかりで何回もおかわりしました。残念なことに、ホストマザーは仕事の関係で一週間に一回しか帰ってこないため、お会いすることができませんでした。ホームステイをしながら、ベトナムと日本の文化を互いに教え合い、すごく勉強になりました。ホストファミリーと衣食住を共にしたことで、ベトナムの文化に触れることができ、日本との違いというものを感ずることができました。ホストファミリーとは、たくさんの思い出を作ることができました。中でも、一番思い出に残ったのは、ホストファミリーと一日過ごした日のことです。父は仕事だったので、家にはホアさんと僕しかいませんでした。でも、他のホストファミリーと一緒に過ごしたので、より楽しむことができました。朝ごはんは、家でフォーを食べました。いつもは外に食べに行くけど、買ってきたのを家で作って食べました。ベトナムではフォーを三回食べたけど、いつ食べても美味しいなあと感じました。その後にみんなで合流し、9人でタクシーに乗りました。バ

イクに4人乗ったりするのは珍しいけれど、タクシーに9人乗るのも珍しいことだと乗りながら感じました。タクシーでお寺に行きました。ベトナムも、日本と同じで仏教が信仰されているので、たくさんの仏像がありました。観音様はすごく大きくて、近くから見上げると、後ろに倒れてしまいそうな感じでした。家に帰ると、料理を作りました。ベトナムと日本の料理を作って食べました。料理を作りながら、材料で分からないものがあれば聞いたりして、日本のものと比較しました。ベトナム料理として、スープと卵焼きにブンをはさんだものをつけ麺のようにして食べる料理を作りました。スープは少し辛みがあったけど、すごくおいしかったのでおかわりもしました。日本の料理として、味噌汁とカツオを使った料理を作りました。ホストファミリーには少し口に合わないものもあったけれど、それが食文化の違いなのだと思います。ベトナムは、昼寝をする習慣があるので少し休みました。その後に市場に行きました。市場は臭いがきついけれど、多種多様な品物があり、とても活気に満ちあふれていて、ベトナム独特の市場だと感じました。市場では、買うときに交渉するので言葉の壁があるけど通訳してもらったり、紙に書いてもらったりして何とか買うことができました。言葉の壁があっても、通じ合えるのだと思いました。また、ベトナムに来て英語の重要性を実感することができました。

ベトナムのJICA事務所を訪問したり、2人の青年海外協力隊の視察を通して国際協力について学ぶことができました。ベトナムの発展のために、言葉の壁を乗り越えて、色々な面で国際協力していることが分かりました。どの国も他国と支え合っていかなければ成り立たない。将来は、互いに支え合いながら人の役に立つことをし、国際協力も行っていきたいと思います。

ベトナムでは多くの経験をすることができました。この経験を糧にして、たくさんのことに挑戦し、多くのことを学んでいきたいと思います。そして、この事業に携わった方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。カムオン！



タイソン中学校の生徒と 本人：中央



ホアさんとダナン市内をバグに 本人：左

ベトナムへ行き

松陽高等学校 2年 増田 美穂

ベトナムと日本の違いを私はまだ分かっていませんでした。教科書や資料集などで見るベトナムの風景と自分の目で見る日本の風景はそんなに違わないと感じました。ベトナムと日本の違いを知りたいと思う気持ちを強く持ち、この体験に臨みました。

私は言語の不安、環境の違いなどは、好奇心から最初はあまり感じませんでした。

そして、ベトナムに着き、気温はあまり日本と変わらないなと感じました。夜景が明るく日本と似ているなと思いました。夜11時頃なのに出店などに人が集まって話などをしていました。だから、夜景がこんなに明るいのかと納得したのを覚えています。これが一番最初に見つけた日本との違いでした。朝になり、外の風景を見ました。そしたらバイクとクラクションの音だけでした。想像はしていましたが見たことのない光景で、目が離せませんでした。道路や建物も立派できれいでした。

ホームステイ先では、家族みんなが私を本当の家族のように受け入れてくれました。とても温かく接してくれました。母さんは私の健康を第一に考えてくれました。父さんは料理、くだものなどの食べ方を教えてくれました。妹は好奇心たっぷりで日本のことを質問してくれました。そして、姉リンさんは日本語が上手でした。友達も紹介してくれ、踊りも見せてくれました。また、日本にもとても興味を持っ

てくれていました。それで、身振り手振りしながらの会話がとてもはずみました。

青年海外協力隊の活動視察で、ある一定の市だけのごみの量を目にしました。日本ではあまり見ない光景にびっくりしました。分別していないゴミを人の手で分ける。このようなことは、人体に有害ではないのか、またけがをするのではないかと心配でした。私の住んでいる財部町はゴミ分別がきちんと行われています。リサイクルできるものを分け、ゴミは再資源として活用されるようになっています。このように最初から分別されていれば、もっと衛生的に資源として活用できるのではないかと思います。

私の想像していたベトナムより実際のベトナムはとても都会でした。道路もきれいで、立派な建物も多かったです。人々も明るく、積極的に器用な人たちばかりでした。そして、日本とベトナムの文化の違いもたくさんありました。外から日本を見つめることで今まで気づけなかったことも気づけました。それは日本での当たり前がどれほど幸せかということです。私はこの体験でたくさんのことを知り、学びました。そして、ちゃんと自分の目で気づけたことに感謝します。ここで学べたことを私は自分の成長に生かしていこうと思います。



ホイアン市のゴミの山



ホストシスターとその友達と 本人：前列中央

ベトナム訪問を終えて

(公財)鹿児島県国際交流協会

事務局長 内和田 浩巳

ユネスコ憲章のプロローグに次のような一節がある。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。……」

私は、今回、青少年国際協力体験事業で中高生と共にベトナムを訪問し、子ども達が見知らぬ国の見知らぬ家庭に突然一人で入り込み、ほとんど通じない言葉の中で一生懸命コミュニケーションを図り、異なる生活習慣の中で寝食を共にしながら4日間一緒に生活し、そして別れの時には、ホームステイ先の同年代の友達のもとより、お父さん、お母さんと抱き合い、涙し、いつまでも別れを惜しむ姿を見て、人と人の絆に人種、国境はないのではないか、こうした感動がある限り国家間の紛争もおきないのではないかと思えてきて、自然に冒頭のことばを連想したところである。

今回の事業目的の一つ、「国際協力」って何なのだろうか。文字通り、国際社会全体の発展のために、国と国とが協力・支援することになるのかと思われるが、元をたせば、人と人とお互いを理解し、支え合うことに他ならないのではないかな。そういった意味で、今回、ベトナムの方々との出会い、別れの中で得られた感謝であるとか感動であるとかが、国際協力の原点に通ずるものであって、人の役に立ちたい、自分のできる範囲内で手助けしたい、という思いまで至ればそれはもうりっぱな国際協力の入り口に到達しているのではないかなと思えてくる。

わずか一週間のベトナム体験事業であったが、今回のベトナム訪問を終えた子ども達は、皆、生き生きと輝きを増したかのように見えた。

子ども達は、ベトナムの日常生活を自分の目で直接みて、触れて、ベトナムの置かれている現状を理解したばかりでなく、これまで生まれ育った日本との文化の違い、考え方の違い、生活習慣の違いなど様々な違いも認識できたものと思う。そして、外から見ることによって、自分達がいかに生まれてから今日まで恵まれた生活を送ってきたか改めて実感できたと思えば、それだけでも大きな成果であると思う。そしてその延長には、日本国民であることの

ありがたさ、両親への感謝というところまで思いを巡らせる子ども達も少なからずいたものと思う。

今回のベトナム訪問を通して、青年海外協力隊への興味を深めた中高生もいるかもしれないし、自分の将来の夢に向けて何らかの参考になるものを掴んだ子どももいるかもしれない、あるいは、漠然とながら感動を覚えて帰ってきた子どももいると思う。いずれにしても、今回のわずか一週間のベトナム旅行が、若い中高生の皆さん一人一人の今後の人生に何らか役立ってくれば大変幸いである。

最後に、私にとっても初めてのベトナム訪問であったが、ベトナム事情や青年海外協力隊の活躍ぶりなどを視察する機会を得られ、また、何よりも子ども達と一緒に行動をすることができて大変有意義な研修旅行であった。訪問団に同行頂き、終始私を支えて頂いた協力隊OBの方々はじめ関係の皆様心から感謝申し上げます。



ホイアンの日本橋前にて 本人：後列中央



好田隊員のゴミ問題対策での説明 本人：左から2番目

体験事業に同行して

青年海外協力隊二ジェールOG 力竹 貴子

私にとって体験事業の同行は今回で3回目、ベトナム訪問も3回目となりました。

もちろん参加する団員も訪問する町も全く違うわけですから、過去2回の同行とはまた違う感動と学びを得る1週間となりました。

調整役としての私の一番の仕事は現地でのスケジュール管理です。

団員17名はこのベトナム訪問に対してそれぞれの期待や思いを胸に抱き、またご両親や共催市、協賛企業、各関係者のご協力のもと実現する事業ですから、ベトナムで過ごす1週間をできる限り実りあるものにしたいという思いが私にもありました。

出発前も出発してから私にできるサポートは何かを常に考え、他の同行者の方々と協力しながら毎日過ごすこととなります。

ハノイのホテルでは皆しっかりと睡眠がとれるだろうか、ホームステイ先では家族との意思疎通がうまくいくだろうか、協力隊員の現場視察では現地が抱える問題や隊員の思いに気づくことができるだろうか、練習してきた出し物はうまく発表できるだろうか、そしてベトナムのことを好きになってくれるだろうか。

しかし団員たちはそんな同行者の心配やハラハラした思いを、いい意味で裏切ってくれるのです。

シャワーはあるものの水しか出なくて寒かった！と笑いながら話してくれた団員。

協力隊員に視察後も積極的に話しかけ、私もいつか参加したいと言ってくれた団員。

病院や学校で披露することとなった出し物に至っては、恥ずかしそうにしていた姿が嘘のように本番では大きな声で歌を歌い、堂々と説明をし、笑顔いっぱい踊り、ベトナムの方々から大きな歓声と拍手をいただきました。

当然思いが通じない悔しさも味わったことでしょう。気を付けていたけれど体調を崩してしまったり、家族が作ってくれたもののどうしても食べることのできない食事もあったかと思います。

それらの経験はどれも日本にいては味わうことのできない体験ばかりです。きっと自分たちが思っ

ている以上に深く心に刻まれ、よい思い出も思い通りにいかなかったことも全て忘れることのできない1週間となったのではないのでしょうか。

団員のみなさんの多くが、またベトナムを訪問したい、ベトナムだけではなくもっと多くの世界を見てみたいと感じたことと思います。その思いがこれからどのように変化しみなさんの将来に影響を与えていくのかを想像すると、私も自分のことのように楽しみです。

今後の活躍を心より期待しています。

最後になりましたが、体験事業実行委員会を始め関係者の皆様、団員、同行者のみなさん、至らない点多々ありましたが私自身も有意義な時間を過ごすことができました。私もまたこの経験を今後生かしていきたいと思います。ありがとうございました。



鹿児島空港にて 本人：左から3番目



現地レストランにて 本人：前列右から2番目

体験事業を通しての気づき

青年海外協力隊ベトナムOG 夏迫 歩美

建設途中のビルやホテル、大きなショッピングセンター、ダナンは私が想像していた以上に開発が進み、街並みがきれいな都市だった。ホームステイ先の住居もベッドがあり、清潔感のある家庭であった。シャワーは水ではあったが、ほとんど日本での生活と変わらないのではないかと感じる程だった。そんなダナンの都会化している街並みは、ベトナム滞在経験のある私にとっては衝撃的であったが、それ以上に今回の旅で印象に残っているのはクワンナム省ホイアン市のゴミの山である。背丈よりも遥かに高く、悪臭放つゴミの山。その上で何か作業している人達がいる。彼らは、リサイクルできそうなゴミを探しては、売って収入にしているそうだ。次に訪れたコンポストも暑い日差しを浴び、より一層鼻をつまみたくなる臭いのきつさ。ホイアン市の街中から収集されたゴミが機械により分別され、最終的に肥料へと変えられる場所。街での収集段階ではゴミは十分に分別されておらず、ここの機械で分別されることになるのだが、機械の分別機能も高いとはいえない。結局は人の手により一つ一つ分別しなければならないのが現状だ。そんなに労力がかかっても、できた肥料の純度は十分とは言えない上、次から次へとゴミは運ばれてくる。発展していく街の裏で、蓄積されていくゴミの山。日本でさえ、分別の技術

が進んでも無くならないゴミ問題。私達が一番目を向けなければならないのに、後回しになる問題。こういう現状が発展の街の裏で起きていることを気づかされた。

きれいな街の裏にあるゴミ問題と同じように、私には今回の旅でもう一つの発見があった。それは、事業に参加した子ども達の姿だ。行きの移動中で「帰りたい」と漏らす子、はしゃぐ子、ベトナム語を復習する子、それぞれがそれぞれのことに集中していた旅の前半。そんな彼らは、乗り物酔いや移動の疲労感と闘いながら、JICAや協力隊隊員の話に熱心に聴き、ホームステイ家族と交流し、ベトナムでの日々を過ごしていった。正直なところ、ダナンの環境は恵まれていたので彼らが何を感じとれるのだろうかとは私は疑問を抱いていたが、帰路に経つ時の彼らがこの疑問を解決してくれた。「帰りたい」と漏らしていた子は、「また、ベトナムに行きたい」と言い、はしゃいでいたようにみえた上級生は「自分たちが元気じゃないと、皆も元気にならない」とさりと話し、「荷物を持ちましょうか」と申し出る子、ホームステイ家族の振る舞いに有難く感じながらも、自分のためにお金を使わせて申し訳ないと話す子、彼らは私が最初感じた印象よりもずっと周囲のことを考え、人を思いやる気持ちを持っていた。

この事業を通し、表面的なことだけでなく、その裏にあるものに気づくことができ、この旅に同行できたことに感謝している。



ホームステイ先にて 本人：中央



ホイアン市内のゴミの山

国際協力体験事業を終えて

青年海外協力隊モロッコOG 谷口 光代

この体験事業を立ち上げられた会長の弓場さんが、昨年第63回南日本文化賞を受賞されました。名誉あるこの体験事業に、今回健康管理として初めて同行させていただきました。まずは、皆が無事に帰国できたことに安堵しています。研修中に大病を患うことなく過ごすことができたのも一人一人が健康管理をしっかり行ってくれていたからです。団員の皆さんの体調を確認するときに色々な話をしてくれたことなど、私も同心になってみんなと笑い、共に過ごした時間が、楽しかった思い出の一つとなっています。団員の皆さん本当にありがとうございました。

団員一人一人が、初めて行く土地、慣れない環境や文化の中で研修に積極的に参加し、言葉が通じなくて困りながらもホストファミリーに心から受け入れてもらっていることを肌で感じ、またそれに応えようと切磋琢磨しており、ハードスケジュールの中で疲れも感じていないようでホームステイ終盤には共に寝る間も惜しんでホストファミリーと一緒にいる時間を大事に過ごしていました。毎日様々なことを感じ成長していく団員の姿を目の当たりにして、この体験事業の素晴らしさを私自身も肌で感じる日々でした。

私は今回ベトナムへの訪問は2回目でしたが、ダナン市は初めてでした。ダナン市は私が想像している以上に都会で、きれいな街並みでした。ダナン空港の到着口を出ると、ダナン人民委員会の方が花束を一人一人に渡し歓迎して下さいました。歓迎はまだまだ続き、団員とホストファミリーとの再会の時、タイソン中学校で文化交流をした時、青年海外協力隊の視察をしたときの協力隊の2名の方とその活動先の関係者の方々、どこに訪問しても心からの歓迎をして下さいました。私がお世話になったホストファミリーも、一緒に過ごす時間は食事の時ぐらいしかありませんでしたが、美味しい食事をたくさんご馳走していただき、ゆっくり休める環境も提供して下さいました。食卓につくとすぐに扇風機を回してくれたり、水を持ってきてくれたり、「優しいですね」と話をする、「ベトナムの人はみんなそうだよ」と、言動全てに優しさが滲みでており、お世話になった同行者ともに、ホストファミリーに毎日癒され、今

度はプライベートで行こうと誓ったほどでした。ベトナム語の勉強を怠っていた私でしたが、短い時間でも心通わすことができたのも、同行者のベトナムOGの夏迫さんのおかげだと感謝しています。

最後に弓場会長を始め、本事業の諸関係者の皆様に心から感謝申し上げます。団員、内和田団長や力竹さんを始め同行者の皆様にはご迷惑をおかけすることもありましたが、とても充実した有意義な時間を過ごすことができました。皆様との出会いに心から感謝しております。また『シンチャオ会』でお会いできる日を楽しみにしています。

団員が日々成長して変わっていく姿を見ることができ、また同行者も学ぶことが多いこの素晴らしい体験事業に同行することができて本当に良かったです。私自身もこの経験や学びを今後活かして頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。



出発前に団員と 本人：左から2番目



ホームステイ先にて 本人：左

ベトナム体感記

(株)南日本新聞社

記者 三宅 太郎

道端に座って談笑する人々、深夜までにぎわう市場、あちこちで建設されるホテル群一。生まれて初めて訪れた海外の地、ベトナムの印象は、一言でいえば「雑然とした活気」だった。必ずしもきれいとはいえないハノイの街並みは、テレビで見た高度成長期の日本とダブって見えた。

ダナン市に入り、中高生たちのホームステイ先を取材してみても、経済大国・日本が既に失った「古き良き時代」をかいま見ることができた。2世代、3世代同居は当たり前。遠来からの客を歓迎しようと親族や近所の人たちが集まってくる家庭も多く、地縁・血縁で結ばれた地域社会の結束の固さには、うらやましささえ感じた。

雑然とした中に息づく活気は、この国が希望に満ちた未来へ向かっていることの証だろう。それでも、滞在していた1週間、常に頭にあったのは「10年後、20年後のベトナムはどうなっているのか」という漠然とした不安だ。経済成長の輝かしい光は、同時に深刻な影もつくる。日本は経済大国の地位と引き替えに、多くの公害病や環境悪化、都市部への人口集中によるコミュニティの希薄化といった代償を支払った。

開発途上国に対する技術支援は当然だ。ただ先進国である日本は、その光の部分だけでなく、影の教訓も伝えていかなければならないだろう。もちろん、そうした観点からの活動もされていると思うが、人々の考え方、意識を変えていく取り組みは、より腰を据えたものにならざるを得ない。

その意味で青年海外協力隊の活動視察は興味深かった。例えばホイアンでは環境教育という形で小学生に「ごみの分別」の必要性を説く。単にごみ処理場やコンポスト工場をつくるだけではなく、次代を担う子どもたちの衛生意識を高めていく。こうした国際協力は欠かせないと感じた。

もう一つ、今回の派遣事業で印象に残っていることがある（というよりも、こっちの方が本筋なのだが…）。それは参加した中高生のたくましさ。結団式では「皆さんの成長ぶりを取材し、紙面で紹介したい」とあいさつしたが、心の片隅には「わずか1週間でどれだけの成果が出るのか」とちょっといじわるな見方をする自分がいた。

そんな心配はまったく無用だった。ホームステイ先でも視察・訪問先でも、中高生たちは「ベトナム」を存分に吸収し、17人の団結力が日に日に強まっていく感じが感じられた。8月中旬に連載「シンチャオ ベトナム」を3回書いたが、むしろ彼ら（彼女ら）がこの1週間で得たものを書き切れなかったの思いの方が強い。それだけ中身の濃い旅だったということだろう。

当然ながら、その裏には内和田団長をはじめとする同行者の支えがあったことも忘れてはいけない。紙面の都合上（そして私の能力上）、連載は3回で終わったが、番外編として「同行者」の回が書けるんじゃないかと思うぐらい、その奮闘ぶりも印象深いものだった。

以上、偉そうなことを書いてきたが、自分自身も初めて日本を離れて異文化に触れたことで、たくさんの刺激を受けた。もっと若いときに経験しておけば…という後悔すら感じるほどだ。息子（小5）が中学校に上がったら、この事業への参加を勧めてみたい。そう思わせる充実の1週間だった。



ホストファミリーと 本人：後列右側



現地学校交流にて 本人：右

鹿児島県青少年国際協力体験事業報告

(株)KYT鹿児島読売テレビ

記者 山崎 淳士

私は今回この事業に同行し、普段できないような体験ができた。まず、ベトナムについてだが、開発途上国でありながら、著しい経済成長を続けていると感じた。ベトナムではホンダやトヨタなど、日本の企業も多く進出していた。少子高齢化が進む日本において、ベトナムは今後、さらに重要なマーケットになっていくのだと感じた。

また、ベトナムは社会主義国家であるが、市場経済を導入するドイモイ政策を打ち出して以降、経済が発展している。ドイモイ政策は地理の授業で習ったが、ドイモイ政策を机の上で学ぶよりも、その場所に行き、感じるのが一番だと思った。

日本とベトナムが外交関係を築いてから40年。非常に親日家が多く、人の温かさを感じた。日本にとって、今後ますます、重要なパートナーとなっていくだろう。

今回のホームステイ先は裕福な家庭が多く、さほどカルチャーショックや貧富の差などは感じず、むしろ、ベトナムの経済の勢いを感じる旅となった。

個人的には食べ物がおいしかった。中国やフランスの影響を受けていると言われており、出てくる料理はすべておいしかった。

一方で、医療環境やごみの処理方法などについては、まだまだ先進国とは大きな差があり、幅広い分野でシステムを整えていく必要がある。



空港にて 本人：左



日本人橋にて団員と 本人：後列中央

また、教育の現場では日本語が非常に人気で、ベトナムの子どもたちが流暢な日本語を話していた。教育システムは充実しており、勤勉な国民性もあり、今後、技術面などでもベトナムが台頭してくるであろうと感じた。

今回、私は中高生に同行する形で取材させて頂いたが、子どもたちの成長も目を見張るものがあった。今の子どもたちは、何かを与えられることが多く、それに慣れている。参加した子どもたちも受け身がちな子が多かったが、海外に出たことで、「何かを伝えたい」、「伝えなければならない」という気持ちが生まれたように思う。実際に、言葉はわからずとも、ジェスチャーを交えながら交流をする姿に変化を感じた。子どもたちは本当にベトナムが楽しかったようで、涙を流しながらお別れをする姿は本当に印象的だった。この出会いは、人生の中で大きな財産になるだろうし、これからの将来に大いに役立つだろう。

私自身も、今回ベトナムの旅で、ホストファミリーや中高生達と出会えたことは、本当に良かった。自分の中高生の頃と比べて、みんな素直で、気持ちの良い子どもたちばかりだった。素晴らしい体験をさせていただいて、自分自身幸せだった。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経 費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数(生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル, サリマンドゥ)	平成3年 3/27(水)~4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 阿久根市, 名瀬市, 市来町, 伊集院町, 祁答院町, 内之浦町, 佐多町	公募
第2回	マレーシア (スプランペラ)	平成4年 3/27(金)~4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 鹿屋市, 大口市, 指宿市, 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成5年 7/23(金)~7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市, 加世田市, 三島村, 隼人町, 志布志町, 高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン, パシールカリキ)	平成6年 8/1(月)~8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市, 出水市, 指宿市, 垂水市, 菱刈町, 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)~8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市, 国分市, 額娃町, 宮之城町, 隼人町, 吾平町, 根占町, 中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピン, バリットムントリー)	平成9年 7/27(日)~8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 東市来町, 伊集院町, 郡山町, 日吉町, 吹上町, 金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クチン, テラガアイール)	平成10年 7/26(日)~8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市, 大口市, 国分市, 菱刈町, 始良町, 蒲生町, 溝辺町, 横川町, 栗野町, 吉松町, 牧園町, 隼人町, 福山町	市町村推薦
第8回	タイ (アユタヤ, ルンカーオ)	平成11年 7/30(金)~8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市, 指宿市, 加世田市, 喜入町, 笠沙町, 知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チェンマイ, メーカンボン)	平成12年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 財部町, 末吉町, 串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン, フーホイ)	平成13年 7/20(金)~7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市, 出水市, 加世田市, 国分市, 垂水市, 祁答院町, 溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン, タンビン)	平成14年 8/4(金)~8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市, 串木野市, 枕崎市, 国分市, 垂水市, 溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマー県 を予定していた)	平成15年 SARS及び鳥インフル エンザの影響により中止			市町村推薦 予定
第13回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, トレングヌ州)	平成16年 7/19(月)~7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市, 枕崎市, 国分市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第14回	ベトナム (ハノイ, ホアビン省, モーハイ村)	平成17年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 枕崎市, 串木野市, 国分市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール, マラッカ市, サバ州)	平成18年 7/22(土)~7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市, 枕崎市, 霧島市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第16回	ベトナム (ハノイ, バクザン省, バクニン省)	平成19年 7/22(日)~7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 枕崎市, いちき串木野市, 霧島市, 南さつま市, 知覧町, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県ポンミー村)	平成20年 7/20(日)~7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南さつま市, 南九州市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県ナーソン村)	平成21年 7/19(日)~7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシ州, ピナバサ村)	平成22年 8/1(日)~8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第20回	マレーシア (クランタン州, クバンテラガ村)	平成23年 7/24(日)~7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, いちき串木野市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第21回	ベトナム (ホーチミン市, ティエンザン省 ヴイントオイ村)	平成24年 7/22(日)~7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市, 鹿屋市, 霧島市, 南九州市, 南さつま市, 枕崎市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
第22回	ベトナム (ダナン市, ホイアン市)	平成25年 7/21(日)~7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市, 鹿屋市, 枕崎市, 霧島市, いちき串木野市, 南さつま市, 南九州市, 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会 推薦
	計5カ国	計(269) 平均13人			

